

研究ノート

唐代伝奇「聶隠娘」についての一考察

—映画との比較から—

上原 徳子ⁱ

本稿は宋代に編纂された『太平広記』所収の唐代伝奇小説「聶隠娘」とその翻案である映画『黒衣の刺客』の比較を通し、唐代伝奇が現代の娯楽作品と共通する要素を持ち得ているのかどうかを検討し、中国古典小説の普遍性について考察する。聶隠娘は、自ら選んだ男性と人生を共にし、自分が仕えたい人に仕えた。この物語が現代においても翻案され続ける理由は、主人公が女性で、しかも彼女が当時の価値観に縛られない存在だからである。物語の中に彼女の果てしない孤独を見てとれば、そこに読み手が心を動かす要素を感じ取ることができるだろう。

キーワード：中国古典小説、唐代伝奇、武俠、映画、翻案

1. はじめに

「聶隠娘」は宋代に編纂された『太平広記』所収の文言^{ぶんげん}で書かれた短編小説である。これには、古典文学としては、清代に尤侗の雜劇「黒白衛」という翻案作品があるが、現代の映像作品としても翻案されている。最も新しいものとしては2020年に中国で撮られた映画『暗殺者・聶隠娘』（中国語原題『聶隠娘之絶命刺殺¹⁾』があるが、最も有名なのは2015年公開の国際映画祭で賞を取った侯孝賢（ホウ・シャオシェン）監督による映画『黒衣の刺客』（中国語原題『刺客聶隠娘』）であろう。

なお、中国では2016年にもテレビドラマ『聶隠娘伝奇²⁾』が撮られたほか、香港では1997年に『大刺客之大唐聶隠娘³⁾』というテレビドラマが放映された。この二つは聶隠娘に双子の姉妹がいた、あるいは対になる少女がいたという設定を持つ。なお、こ

れらの最も新しい映画と香港のテレビドラマは女性達の生き方を描くとともに戦闘場面が見せ場であると推測できるため、現段階では『黒衣の刺客』とは着眼点が異なる翻案であると考えられることから本稿では扱わない。ともかく、「聶隠娘」の映像化が複数回行われていることから、この物語が中華文化圏で一定の知名度と人気があることがうかがえる。

文学作品が映像化される“翻案”は、中国に限らずいたるところでみられるが、文字から映像への変換は、作り手が原作を材料として新たな創造をするのに近く、そのかたちは様々である。近年は、学術研究の場でもさまざまな作品における映像化「フィルム・アダプテーション」が分析の対象となっている。無論、中国文学、もっと範囲を狭く限定すれば中国古典文学においても、映像化作品は無数に存在している。日本で最も知名度が高いのは、『三国志』であろう。これまで何種類ものテレビドラマが撮られているし、映画、漫画、アニメ、ゲームなど、広くさまざまな形で人々に受容されている。

i 立命館大学産業社会学部教授

本論文は、中国の古典文学、中でも文言（書き言

業、いわゆる漢文)で書かれたものの翻案作品に着目し、本来極めて単純な構造しか持たない古典小説がどのように映像化されたのかを検討した。もちろん出来上がった映像作品は脚本家や監督の意志が反映された結果ではあるが、本稿はそこは切り離し、観客が目にする作品そのものと原作(本稿では以下「原話」と称する)を比較し、古典小説の受容の可能性と意味を考察する⁴⁾。

そもそも、中国古典文学のジャンルの一つである小説は、いわゆる現代の「小説」という概念に拠れば英語でいうところのfictionである。しかし実際には、近代社会で生み出され消費されてきた「小説」とはその中身が違っている。簡単に言えば、古典中国語の「小説」は元来つまらない話という意味であり、いわゆるfictionとは違った概念である。

中国の古典小説について、近代的文学概念を持ち込んでまとまった言及をしたのは魯迅の『中国小説史略』である。唐代において、いわゆる現代の日本で用いられるところの「小説」は「伝奇」といわれる。魯迅は唐代伝奇について「まだ奇聞を探し逸事を記すことから離れてはいないけれども、叙述は曲折にとみ、文章は華麗で、六朝の梗概を略述したのと比べるとその進化の跡は歴然としており、なかでも顕著なのはつまりこの時代から始めて意識的に小説を書いたことである⁵⁾」と述べる。彼自身が唐宋の伝奇を集めて『唐宋伝奇集』を出版したし、唐代伝奇は、いわゆる近代的な意味での小説観で中国古典を再認識する出発点として重視されてきた。また、これまでの研究において唐代伝奇を考察する際には、その作者の特定や、それが書かれた背景の分析が主であった。例えば恋愛をあつかった作品に関しては、作品中に作者自身の経験の反映が指摘されることもある。宋代以降、中国では白話(話し言葉に近い文体)で書かれた小説や戯曲が隆盛を迎えるが、それらの中にもいくつも唐代伝奇に着想を得たものが含まれている。唐代伝奇は中国古典小説史さらには古典小説研究の中で大きな比重を占める重要な存在であり続けているのである。

以上のように、唐代伝奇については中国はもちろん日本でも長い受容と研究の蓄積があるが、本稿はそれらとは少し違った方向から考えてみたい。

筆者は、これまで林語堂(1895-1976)による唐代伝奇の英訳あるいは翻案作品について論考してきた⁶⁾。その中で、一体林語堂はなぜ唐代伝奇を欧米の読者に英語で読ませようとしたのかという疑問を抱いた。そもそも、唐代伝奇そのものが近代小説に通じる要素をもちあわせているのではないかと考えたが、それらがあまりに欧米の読者にとって遠いものであるためにその好奇心を刺激するために英訳したとも考えることができた。その検討の途中で、唐代伝奇の映像化という翻案事象を分析してみようと考えたのである。

翻案(アダプテーション)は作品を作り替える行為である。現代では小説(文字)から映像(映画やテレビドラマなど)、またはゲームになったり、場合によっては映画のノベライズのように映像から文字へと媒体をこえた作り替えが行われている。特に小説から映画への作り替えについては、前述のとおり研究の蓄積があり、近年でも年研究が盛んな分野といえる。

唐代伝奇は古典であり、「近代」小説の要素を持っていない。一方、映画は、現代の映像表現形式である。しかも唐代伝奇から映画への翻案には文字から映像への転換を含むため、文字と文字の変換である古典小説を近代小説に翻案する以上にその距離は離れている。本稿は、そこに描かれた内容に注目し、映画の内容から原話に書かれたものを引き算できるのか、すなわち映画化の際何か足されているのかをみていく。あるいは、映画は原作をばらばらにしてつなぎあわせているのかもしれないし、原話の枠組みだけが採用されているのかもしれない。それらを比較検討することで、唐代伝奇が現代の娯楽作品と共通する要素を持ち得ているのかどうかを考えてみたい。いわば中国古典小説の普遍性についての考察である。

2. 「聶隱娘」のあらすじ

「聶隱娘」は、唐代伝奇の中でもよく知られている話であるが、ここで改めてその内容を確認したい。

「聶隱娘」は、宋代の叢書『太平広記』巻194にみえ、裴鉞の『傳奇』に拠るとされる⁷⁾。『太平広記』では、「豪俠」に入っていることから、「豪俠小説」と分類され、聶隱娘は「俠女」と称されることもある。

そのあらすじは以下の通りである。

聶隱娘は、貞観年間（758-804年）魏博（河北省）の大將だった聶鋒の娘である。彼女が10歳の時、托鉢にやって来た尼が聶隱娘を気に入り預かりたいと申し出た。鋒は拒絶したが結局娘を盗み出されてしまう。それから5年後、尼は聶隱娘を送り返してきた。父親が娘に尋ねたところ、修行の末、不思議な術と密かに人を殺せる剣の技を習得させられたという。尼は、最後に聶隱娘の後頭部に匕首をしまい、使いたい時にそれを使うように言い、「技は全て身に付けた、20年後に再び会おう」と言って彼女を送り届けたのだという。娘は夜に出かけ明け方に帰るようになったが、父親はそれを問い詰めず、大いに娘を恐れ愛情が持てなくなった。

ある時鏡磨きの若者が聶家に立ち寄ったところ、聶隱娘はその若者が自分の夫になるべき人だといひ、すぐに彼に嫁いだ。その若者は鏡を磨く以外に特に能力があるわけではなかった。父親は彼らを援助し、数年後に亡くなった。魏博の節度使は、彼女の能力を知っており、金帛を送り夫を取り立てた。

さらに数年後、憲宗の元和年間（708-820）になって、魏博の節度使は自分が対立する劉昌裔の首をとるように命じた。劉は占いにより彼女の到来を知っており、部下がその指示に従って夫婦に接触し彼らと劉は対面した。聶隱娘は劉に感服し、彼に仕えることを申し出、劉はそれを許した。

一ヶ月ほど後、聶隱娘は魏博から暗殺者が来るこ

とを予告し、不思議な技を使った暗殺者達との対決を経て二人の暗殺者を退けた。その後、劉は都へ異動となったが、聶隱娘はそれについていかなかった。やがて劉が亡くなった際には現れて慟哭した。さらに文宗の開成年間（836-840）に劉の息子劉縱が地方に赴任する途中彼女に会い、災難を予告されたが彼はそれを信じず亡くなった。その後は聶隱娘を見かけた者はいなかったという。

「聶隱娘」は、実際の年号や地名、人名が使われていることから、史実の記録のようにみえるが、実際は、刺客たちとの戦いの場面では奇想天外な技が飛び交う極めて現実離れした物語である。このような物語をどうとらえるべきなのか、「聶隱娘」が唐代伝奇の一つである以上、まずは唐代伝奇の特徴から考えてみたい。

『中国古典小説選5 枕中記・李娃伝・鶯鶯伝他』の「唐代伝奇について」では、唐代伝奇の特徴として、次の4点を挙げている⁸⁾。

- 一、作者の存在が認められ、その創意によって虚構世界が構築されていること。
- 二、六朝志怪を源としながらも、怪異より人間と人生に比重を置いて描かれていること。
- 三、歴史及び歴史書と深い関わりがあること。
- 四、詩作が効果的に用いられている作品も見出せること。

以上の4点が特徴だとすると、「聶隱娘」については、詩は含まれておらず4番目が当たらない。

上記条件の3番目「歴史及び歴史書と深い関わりがあること」は、小説というジャンルの成り立ちに深く関係がある。元々小説という言葉は「街談巷語」を稗官が収集したことに由来する。孔子の「怪力乱心を語らず」という考え方は、その後の士大夫（知識人）の書く散文に大きな影響があった。虚構の世界を描くことが好ましいことではないため、彼らは自分の書くことが事実であることを強調する。そう

すると歴史書とその性格が近くなる。前掲の唐代伝奇の特徴には「虚構世界が構築されている」ことが挙げられているが、実際唐代伝奇の多くが実在の人物を登場させたり、日付を記している。これは、虚構であることを作品自らが否定し真実であることを裏付けるためである。しかし、虚構部分はおそらく書き手の「創意」とつながっている。当時の書き手は、自分が書いたものをできるだけ虚構だと思われなくなかったが、その一方で自分にしか書けないものを目指していたのだといえよう。そうであるならば、唐代伝奇の「創意」の中身はもっと着目されるべきではないか。

また「怪異より人間と人生に比重」を置いていることが特徴とされているが、これは一つ前の時代の「六朝志怪」との違いという意味で挙げられたのであろう。「六朝志怪」は、怪異な現象そのものを飾ることなく記している。唐代になって、そこに事実の記録だけでない別の要素が加わったというのがこれまでの研究の中でいわれてきたことである。「聶隱娘」について、これまで、実在の人物名が記されていること、その年代がほぼ正確であることから、唐代後期の藩鎮の争いを反映していると言われている。その一方で、聶隱娘が小さくなり人間の体の中に隠れてその中で敵と戦ったり、聶隱娘夫婦が紙でできた馬に乗ったりといった実際にはありえない状況が描かれており、その現実離れした内容は豪俠小説の特徴とされている。唐代伝奇全てが上述の4つの特徴を持ち合わせているわけではない。この「聶隱娘」も登場人物の心情が強く感じられるものではなく、淡々と出来事が述べられている。ただ、その出来事が超常的である点が他の伝奇と異なる特徴といえる。

岡崎由美氏は、豪俠小説は「神仙と同じく、常人には計りがたい一種の超人の活躍を興味の対象として」いて、そこには「説明抜きで共通に受容されるイメージの基盤」があったことが、聶隱娘が刺客になった理由や彼女を育てた尼の正体といった肝心な設定が書かれていない背景だと述べる。つまり、読み手は、得体の知れないこの世界から一瞬

垣間見えた不思議な世界を捉えることで満足しており、なぜそんなことが起こるのか、あるいは聶隱娘たちのコミュニティがどうなっていたのかはあまり問題とされていなかったということであろう。

目の前に起きたことがどれほど不可解で超自然的なことであってもそれが「事実」であるならば、「虚構」ではない。だが、「聶隱娘」において展開される情景は明らかに超自然的で、虚構としか思えないものだ。この奇妙な現象は、あくまでも「事実を記録」しているという建前を守ろうとするからこそ起こっているもので、そもそも全てがフィクションだと割り切れればすっきりするのだが、それができない。中国の古典小説には常にこの問題がつきまとう。いずれにせよ「聶隱娘」では、登場人物の心情よりも彼らが用いる怪異な術に重きが置かれていることを踏まえなければならない。

3. 『聶隱娘』の構造

ここでは、この後映画との比較をするために、まずは元々「聶隱娘」がどのような構成なのかについて検討したい。本稿では「聶隱娘」は聶隱娘の結婚を境として、それらを大きく前半と後半の二つに分けることができると考えた。先に一度梗概を述べたが以下原文⁹⁾を併記する形で改めて詳しく構造を検討したい。

[前半 — 彼女が親元を離れ女道士の元で修行して家に帰されるまで]

※網掛け部分は、聶隱娘が語る部分であり、時系列としては過去の出来事であるので区別した。さらわれた娘が父の質問に答える形で、過去にどのようなことがあったのかを述べる部分である。

※特に時間の経過を強調するため で囲んだ語がある。

①聶隱娘者、唐貞元中、魏博大将聶鋒之女也。年方十歳、有尼乞食于鋒舍。見隱娘悦之、云、問押衙

乞取此女教。鋒大怒，叱尼。尼曰，任押衙鐵櫃中盛，亦須偷去矣。及夜，果失隱娘所向。鋒大驚駭，令人搜尋，曾無影響。父母每思之，相對涕泣而已。

聶隱娘は、10歳の時、托鉢にやって来た尼に誘拐されてしまった。なお、父親は尼の娘を引き取りたいという申し出を拒否しており、さらに両親ともに娘が行方不明になって手がかりのない状況に涙している。

②後五年，尼送隱娘歸。告鋒曰，教已成矣。子却領取，尼歟亦不見。一家悲喜。問其所学，曰，初但誦經念咒。余無他也。鋒不信，懇詰。隱娘曰，真說又恐不信，如何。鋒曰，但真說之。

誘拐されてから5年後、尼は聶隱娘を送り返してきた。そこで何があったかを尋ねる父に答える形で聶隱娘の5年間の語られる。

②-1日，隱娘初被尼挈，不知行幾里。及明，至大石穴之嵌空數十步，寂無居人。猿狖極多，松蘿益邃。已有二女，亦各十歲。皆聰明婉麗不食。能於峭壁上飛走，若捷猿登木，無有蹶失。尼与我葉一粒，兼令長執宝劍一口。長二尺許，鋒利吹毛。令割逐二女攀緣，漸覺身輕如風。

連れて行かれた先には既に同じ年の2人の女兒がいた。聶隱娘は尼から一粒の葉と長く鋭い剣を与えられ、二人の女兒を追いかけるうち、彼らのように身軽になっていった。

②-2一年後，刺猿狖百無一失。後刺虎豹，皆決其首而歸。

1年後、猿や虎、豹を百発百中で殺せるようになった。

②-3三年後能飛，使刺鷹隼，無不中。劍之刃漸減五寸，飛禽遇之，不知其來也。

3年後、飛べるようになり、鷹や隼を必ず刺せるようになった。剣の長さは次第に短くなった。

②-4至四年，留二女守穴，挈我於都市，不知何處也。指其人者，一一數其過曰，為我刺其首來，無使知覺。定其肝，若飛鳥之容易也。受以羊角匕首，刀廣三寸。遂白日刺其人於都市，人莫能見。以首入囊，返主人舍，以藥化之為水。

4年がたつと、尼は二人の女兒を留守番に残し聶隱娘を町に連れて行った、そして、ある人物を殺すように指示し、聶隱娘は白昼その人物を殺し、その首を持ち帰ったが、尼が薬でそれを水に変えた。

②-5五年，又曰，某大僚有罪，無故害人若干。夜可入其室，決其首來。又携匕首入室，度其門隙，無有障礙。伏之梁上，至暝，持得其首而歸。尼大怒曰，何太晚如是。某云，見前人戲弄一兒可愛，未忍便下手。尼叱曰，己後遇此輩，先斷其所愛，然後決之。某拜謝。尼曰，吾為汝開腦後藏匕首，而無所傷。用即抽之。曰，汝術已成，可歸家，遂送還。云，後二十年，方可一見。

5年目に尼は再び聶隱娘にある人物を殺すように命じた。彼女は梁の上で身を潜め暗くなってから首を取って持ち帰った。尼は帰りが遅かったことに怒った。聶隱娘が、標的となっている人物がかわいい子どもをあやしていたため、すぐに手を下すのが忍びなかったと話したところ、尼は、今後はその者がかわいがっている方をまず殺して、その後で標的の人物を殺すように言った。聶隱娘が謝った後、尼はいつでも使えるように匕首を聶隱娘の後頭部に入れ、もうすべて教えたので家に返す、20年後に再び会おうと言った。

②-6鋒聞語甚懼。後遇夜即失蹤，及明而返。鋒已不敢詰之，因茲亦不甚憐愛。

父親はこの話を聞き恐れおののいた。娘は夜になると姿を消し、朝になると帰ってきた。父親は問い詰めず、このようであるから娘のことをそれほど大事に思わなくなった(茲に因りて亦た甚だ憐愛せず)。

この部分の最後で、父親が娘をそれほど大事にしなくなったことが述べられるが、これを「親の子離れ」と解釈する¹⁰⁾見方もある。しかし本稿はそれとは別の側面を指摘したい。それは、ここに見られるのは、親が娘と過ごすはずの時間を奪われた結果、両者の間に生じた溝であるというものだ。①部分で、両親は娘を捜し求め、行方がわからないために涙している。そこでは親が子を思う自然な姿が描かれる。しかし、5年後帰ってきた娘は、父親が聞いても身

震いするような恐ろしい術を身につけた暗殺者になっていた。しかもすでに殺人を犯していたのだ。ここには、離れて過ごすうちに、失われた互いへの思いのすれ違いが見いだせるのではなからうか。一方、誘拐され、先住の同じ境遇の娘たちと尼に命じられるがままに振る舞うしかなかった聶隱娘が、淡々と自分の殺人について告白するこの一段は、恐ろしさの一方、憐憫の情を抱かされる。両親の元で生まれるべき大事な時間を奪われ、殺人の術を身につけさせられた少女が、特に親からの愛情を求める様子もないことに、この状況の異常さが一層際立つ。ただし、以上のような登場人物の心情をうかがわせる描写はない。

[後半 — 聶隱娘の結婚以降]

③忽值磨鏡少年及門。女曰，此人可与我為夫。白父，父不敢不從，遂嫁之。其夫但能淬鏡，余無他能。父乃給衣食甚豐。外室而居。數年後，父卒。魏帥稍知其異，遂以金帛署為左右史。

鏡磨きの若者が聶家に立ち寄ったところ、聶隱娘は彼を自分の夫となるべき人物だといひ、父親も結婚を許すしかなかった。聶隱娘はすぐに彼に嫁いだ。數年後、父親が亡くなったが、魏博の節度使はその能力を知っていたため、彼らを手元においた。

聶隱娘がなぜこの鏡磨きの男を夫と決めたのかは何も書かれていない。さらに「其夫但能淬鏡，余無他能」とあり、夫は鏡を磨くことしか能力が無いとまでいわれている。聶隱娘ほどの技の持ち主が望んで結婚する理由はあったのだろうが、確かなことはわからない。鏡の持つ魔除けの力が関係している等の推論はあるが、不可思議な設定である。

④如此又數年。至元和間，魏帥与陳許節度使劉昌裔不協，使隱娘賊其首。引娘辭帥之許。

數年後、魏博の節度使は、聶隱娘に自分の対立する陳許の節度使劉昌裔の首をとるように命じた。主人からの暗殺指令である。

⑤劉能神算，已知其來。召衙將，令來日早至城北，候一丈夫一女子，各跨白黑衛至門。遇有鵲前噪夫，夫

以弓彈之不中，妻奪夫彈，一丸而斃鵲者，揖之云，吾欲相見，故遠相祇迎也。衙將受約束，遇之。隱娘夫妻曰，劉僕射果神人，不然者，何以洞吾也。願見劉公。劉勞之。隱娘夫妻拜曰，合負僕射万死。劉曰，不然，各親其主，人之常事。魏今与許何異。願請留此。勿相疑也。隱娘謝曰，僕射左右無人，願舍彼而就此，服公神明也。知魏帥之不及劉。劉問其所須。曰，每日只要錢二百文足矣。乃依所請。忽不見二衛所之。劉使人尋之，不知所向。後潛收布囊中，見二紙衛，一黑一白。

聶隱娘と夫はそれぞれ白と黒の驢馬に乗ってやってきたが、劉は占いにより彼女らの到来を知っていた。夫妻は、自分たちを見抜いた劉に感服し、魏博から寝返ることにした。彼女は、毎日二百文を支給されることを求め劉はそれに応えた。二匹の驢馬が見えなくなったが、彼らの布袋を密かに調べると、白黒一枚ずつの紙の驢馬を見つけた。

ここで聶隱娘が魏博の節度使に劉昌裔の暗殺を命じられたにも関わらず、かえって劉の人物に感じられて寝返ったことについて、先行研究では「主君への忠誠こそ至徳とされる儒教では、最も指弾されるべき行為であろう。だが彼女は自分の鑑識眼に自信を持ち、それを貫いたのである¹¹⁾」とされ、彼女の行為は礼教への抵抗とみなされている。とはいえ、彼女は女道士の元で超人的な技を学んでいたであり、元々世俗の価値観に縛られていない。その行動が礼教への抵抗とまでいえるのか、本稿はこの点については判断を保留したい。さらにここでは、紙の驢馬に乗って現れるという殺人とは関わらない聶隱娘の別の技も披露されている。

⑥後月余，白劉曰，彼未知住，必使人繼至。今宵請剪髮，繫之以紅綃，送于魏帥枕前，以表不迴。劉聽之。至四更，却返曰，送其信了。後夜必使精精兒來殺某及賊僕射之首。此時亦万計殺之。乞，不憂耳。劉豁達大度，亦無畏色。是夜，明燭，半宵之後，果有二幡子，一紅一白，飄飄然如相擊于牀四隅。良久，見一人自空而踏，身首異處。隱娘亦出曰，精精兒已斃。拽出于堂之下，以藥化為水，毛髮不存矣。隱娘曰，後

夜当使妙手空空兒繼至。空空兒之神術，人莫能窺其用，鬼莫得躡其蹤。能從空虚之入冥，善無形而滅影。隱娘之芸，故不能造其境。此即繫僕射之福耳。但以于闐玉周其頸，擁以衾，隱娘当化為蟻蠊，潛入僕射腸中聽伺。其余無逃避處。劉如言。至三更，瞑目未熟，果聞項上鏗然，聲甚厲。隱娘自劉口中躍出，賀曰，僕射無患矣。此人如俊鶻，一搏不中，即翩然遠逝，耻其不中，纔未逾一更，已千里矣。後視其玉，果有匕首割處，痕逾數分。自此劉軫厚礼之。

一ヶ月ほど後、聶隱娘は魏博から暗殺者が来ることを予告し、精精兒と空空兒という名の二人の暗殺者を退けた。ここがこの話の肝となる部分であろう。彼女は超人的な技を駆使して刺客を退ける。まず、精精兒がやってきた。真夜中に赤と白の二本の幟が現れ、それが打ち合っているようにみえたが、しばらくするとそのうち一人が首と体がばらばらになって空を仰いで倒れるのが見えた。勝ったのは聶隱娘であり、彼女はその死体に薬をかけて水にしまった。(これは彼女の回想場面で彼女の師匠が行った行動と同じである。)その後は聶隱娘自身がその術に及ばないと認める空空兒がやってくるという。聶隱娘は蚊に姿を変え、玉を首に巻いた劉の腸の中に潜み、機会をうかがった。すると劉の首の辺りで激しい音が聞こえた。聶隱娘は口から飛び出すと、空空兒が一撃が命中しなかったことを恥じて遠くに去ったと告げた。玉を調べたところ確かに切りつけた後があった。劉はますます聶隱娘を重んじるようになった。

「果有二幡子，一紅一白，飄飄然如相擊于牀四隅。」という部分から、聶隱娘と精精兒が戦っていたことはわかるが、その場所は劉の寝床の四隅であり、二人がいったいどんな戦いをしていたのかは読者にはよくわからない。それは、空空兒との戦いの部分でも同じである。実は具体的な戦いの描写は全くなく、我々はただ現実にはあり得ない技の存在を知るだけである。

⑦自元和八年，劉自許入覲，隱娘不願從焉。云，自此尋山水，訪至人。但乞一虛給與其夫。劉如約，後漸不知所之。及劉薨於統軍，隱娘亦鞭驢而一至京師，

柩前慟哭而去。

その後元和8(813)年、劉昌裔は都へ異動となったが、聶隱娘はそれに同道せず、夫に仕事を与えて欲しいとだけ願った。その後は劉が亡くなった際に現れ慟哭した。

⑧開成年，昌裔子縱除陵州刺史，至蜀棧道，遇隱娘，貌若當時。甚喜相見。依前跨白衛如故。語縱曰，郎君大災，不合適此。出葉一粒，令縱吞之。云，來年火急拋官歸洛，方脫此禍。吾藥力，只保一年患耳。縱亦不甚信。遺其繒綵，隱娘一無所受。但沉醉而去。後一年，縱不休官，果卒于陵州。自此無復有人見隱娘矣。

開成年間(836-840)になって、劉昌裔の息子劉縱が地方に赴任する途中、彼女が姿を現したが、三十年ほど経っていたのにも関わらず容貌は若いままであった。聶隱娘は劉縱に災いが訪れると予言し逃れ方も指南したが、その通りにしなかったためか、彼は結局亡くなった。そしてその後は彼女を見かけた者はいなかった。

年を取らず、以前と変わらず不思議な能力を發揮する聶隱娘は、どこへともなく消えてしまった。

以上からわかるように、この物語がもっとも字数を割いて描写するのは、聶隱娘の修行と暗殺者精精兒と空空兒との術を駆使した戦いの場面(⑥)である。このことから、この話の書き手が最も伝えたかったのは、現実にはあり得ない術を用いた彼女たちの戦いだったとあってよいだろう。

聶隱娘は、劉昌裔の能力を見込んで自ら主人を変え、自分の提示した条件の毎日200文を受け取ることを承諾させ(⑤)さらに、劉昌裔の都行きには同道せず姿を消すなど、自分の意志をはっきりと貫いている。俗世のしがらみにとらわれない生き方が許されている存在なのであろう。ただ、劉昌裔の死を悼み、さらにはその息子に災いが起こることを忠告する(⑧)など、自分が主人とあおいだ相手には真心を尽くしている様子も描かれる。

この話全体の構造をみると、聶隱娘の回想である

網掛け部分を除き、物事は時系列に沿って述べられ、他の唐代伝奇のように詩をはさむこともない。

登場人物は複数いるが、中心は当然聶隱娘である。聶隱娘は消失と出現を繰り返す。はじめの誘拐こそ彼女の意志とは関わりは無かったが、5年後の帰宅以降は、結婚を含めて、彼女は自由に行動しているように見える。劉昌裔の殺害についても、一度は雇い主の命令に従うが、結局は自らの意志で自分の仕える相手を変えて暗殺を取りやめる。彼女たち夫婦の乗る驢馬が実は白と黒の紙であったとか(⑤)、暗殺者たちと戦う様子(⑥)からは、聶隱娘が身につけた常人の域を超えた術がうかがえる。細部に見せ場はあるが、それ以外は極めて単純であり、何より人の心の動きはほとんど描かれぬ。そして、彼女は家族と引き離されて以来、儒教的価値観から逸脱した自由な人間であり、生き方そのものが当時の人々(特に女性)とは大きく異なっている。これもこの話の特異性だといえる。

この物語の肝となるのは、やはり普通ではない存在である聶隱娘とその周辺の人間の業、不思議な出来事である。では、映画はその部分を大きく膨らませて娯楽作品としてこれを表現しているのだろうか。

4. 映画『黒衣の刺客』

『黒衣の刺客』(中国語原題『刺客聶隱娘』)は2015年公開の侯孝賢監督による映画である¹²⁾。この映画は「武侠映画」に分類されるが、「武侠映画」とは岡崎由美氏によれば「中華チャンバラ時代劇」であり¹³⁾、「武侠」は中国語圏では独自の地位を確立したジャンルである。しかし、実のところこの映画は武侠映画の肝ともいえるアクションシーンが「全部合わせても10分程度のボリューム¹⁴⁾」しかない。さらには「(聶隱娘や彼女と闘う者たちの)超人性をいかに視覚化するかが武侠映画の課題であり進化の過程だったが、ホウ・シャオシェンはまったく逆をいき、見事な効果を生み出した¹⁵⁾」と評されている。

先にみたように、唐代伝奇「聶隱娘」の肝は、戦

いの場面である。そこを視覚化しなかったということは、原話のどの要素が取り上げられたというのであろう。

この映画は、『悲情城市』でヴェネチア国際映画祭グランプリを受賞した侯孝賢監督の8年ぶりの作品であったこと、カンヌ国際映画祭コンペティション部門で監督賞を獲得したことなどから話題となった。日本公開版では、妻木木聡演じる日本からやってきた青年の回想シーンが挿入されているほか、映画には京都・奈良・兵庫での撮影シーンも含まれる。

この映画が創作された過程そのものが、古典作品の「翻案」の事例として考察するに値する興味深いものなのだが、それは改めて扱うとして、本稿は、映画と原作との構造的な違いを中心にみていきたい。もちろん、映画は画像があり音楽がある。そこは文字のみで構成されている古典作品とは全く異なる点であることは認めた上で物語の進行を中心に検討したい。

まず、詳細を比較する前に、映画の物語の背景についての設定を確認する。

舞台は唐王朝の中期以降、節度使たちが地方で力を持っていた時代である。魏博の節度使は田氏であった。節度使たちは軍閥化しており、朝廷をも揺るがす勢力となっていたが、中でも魏博は強大な力を持っていた。なお映画に登場する田季安は実在の人物であるが原話には登場しない。

以下原作と細部を比較してみよう。

映画は白黒の画面から始まる。前章分析の②-5の聶隱娘の言葉にあった、誘拐されて5年後、彼女が暗殺の標的の子どもの存在に殺人をためらい、時間がかかったことを尼に叱られる場面がそれに当たる。その後カラーの画面となってタイトルが表示される。

次のシーンでは、聶隱娘が女道士によって家に帰される。しかしその真の目的は田季安の殺害であった。

原話にあった、①と②の「聶隱娘は、10歳の時、托鉢にやって来た尼に誘拐されてしまい、5年後、送

り返される」という大枠の設定に変わりはない。ただし、原作と異なる点として、彼女は誘拐されたのではなく周囲の者に預けられたことになっていることがある。彼女が女道士に預けられた理由は、聶隱娘の母親によって語られる。母親は公主（後述）に授けられた玉珓を娘に渡ししながら、公主の最期について、そして公主が彼女を心配していたことを聶隱娘に告げる。聶隱娘はそれを聞き、声を出さずに泣いた。

この部分は原話には存在しない。映画でも彼女がいったい何に対して泣いたのか、具体的には語られない。公主への思いからなのか、自らの意志に反して家族と引き離され過酷な修行をし、人を殺すことを生業とせざるを得なかった運命への涙なのか、見る側に任されている。

魏博の節度使に嫁ぎ田季安の義母となった嘉誠公主（皇帝の娘）は女道士嘉信の双子の妹である。唐代伝奇に登場する尼は道教に関わりがあることはすでに指摘されているが、映画ではその「道士」のイメージを採用した人物像が形成されている。公主は聶隱娘と田季安を婚約させたが、田季安は父の意向で魏博と同盟を結んでいた元家と縁組みすることとなり聶隱娘との婚約は破談となってしまう。また、映画では、後に聶隱娘が元家から命を狙われたため嘉誠公主が姉の道士嘉信に彼女を預けたことになっている。（なおこれは13年前のこととされる。そうすると、誘拐から帰宅まで、原話の5年よりはるかに長い時間がたっている。）また、この「理由」の部分は、田季安自身が愛妾に対して語る話の中で述べられている。その田季安は元家から嫁いできた正妻とは折り合いが悪く、妾に心移している。なお、いささか複雑ではあるが、田季安が妾にこの話をきかせている時、聶隱娘は密かに寝室に侵入しており、田季安の話を現場で聞いている。自分の夫となったかも知れない人物を殺すために侵入しながらそうしようとせず、かつての婚約者が愛妾にしている自分の話を聞いているという構図は、聶隱娘にとっては残酷であり、具体的な言葉をともなわずとも彼女の内面

の苦悩を表しているといえるだろう。

田季安の正妻元氏は妾の妊娠を快く思わず、道士（女道士とは全く別の男性道士）に呪術をもって災いをもたらすようにしむける。ここに原話にもみられた紙製の人形や精精児が登場する。しかしながら、部分部分にその名残はあるものの、これ以降は全くのオリジナルといってよい展開となる。

一方、場面は移り、田季安に疎まれた義兄田興を護送している聶鋒が何者かに襲われ、それを旅の青年が救う場面となる。ここで武俠映画らしい戦闘の場面となる。ここに登場するのが旅の鏡磨きの青年である。鏡磨きの青年は何者なのか映画の中では特に説明がないが、彼は遣唐使として中国に来たものの船の難破のため一人で行動しており、新羅経由での帰国の途中にある日本人と設定されている。これが原話の聶隱娘の夫にあたるのであろう。ここで、父親を密かに守っていた聶隱娘が襲い掛かる敵をすべて倒し父親たちを救う。負傷した聶鋒たちは一旦身を隠し、その際、聶隱娘は父親と心を交わす。父親は彼女が道士の元で育てられたばかりに暗殺者となったことを悔いていることを伝える。日本版は、ここで登場した日本人青年（鏡磨きを生業にしている）の妻の回想シーンが挿入されるが、聶隱娘や話の進行とは何ら関わりのない場面である。

この後、元家が差し向けた刺客精精児との戦闘シーンがある。精精児は女性で、仮面をつけている。この時二人は術を使って戦うというわけではなく、直接剣を交えるのだが、去っていく精精児の仮面が打ち落とされていることから、聶隱娘が勝利したことが暗示される。

一方正妻元氏が依頼した道士は、人形を用いて田季安の愛妾を傷つけようとする。聶隱娘は術中にはまりそうなところを救ったものの、誤解され田季安と戦うことになってしまうが、結局は彼に妾の妊娠を告げて去っていく。田季安は、妻の陰謀に気づき、道士は殺される。

その後は、聶隱娘が道士嘉信に別れを告げる場面である。彼女は田季安を殺さなかったことを師匠で

ある女道士に報告する。道士嘉信は彼女が情を断てないことを指摘するが、聶隱娘は何も言わずその場を立ち去る。嘉信は聶隱娘に襲いかかるが彼女が倒されることはなかった。

そして映画は、聶隱娘が青年を新羅に送るために、合流し、共に去って行く場面で終わる。

以下、映画オリジナルの部分での両者の違いを整理してみると以下の通りである。

- ・鏡磨きの若者と聶隱娘が出会う点は同じだが、若者には妻がおり、二人は結婚はしない。
- ・聶隱娘が女道士以外に暗殺を命じられて戦う場面はない。
- ・原話と大きく異なる後半では、聶隱娘が何処とも知れず去っていくという最後の描き方だけが幾分似通っている。

気になるのは、術を使った戦闘場面が全く描かれなかったことである。そもそも人対人の戦いの場面にかけられた時間も非常に短いことについてはすでに触れた。

岡崎由美氏は、「時代を1200年先取りしたこの物語を現代のSFXで映画化すると、凡百のアクション映画にしかなるまい。格闘の特撮に走らなかったのは、監督の見識であろう¹⁶⁾」と述べる。では、原話「聶隱娘」が描く現実離れた戦いの場面は、この映画にとっては不必要な要素であったことになる。原話のいったい何が必要だったのだろうか。

原話①から⑧のうち、『黒衣の刺客』が採用したのは、①と②部分のうち、大枠の設定にすぎない。初めに述べたように、唐代伝奇は古典であり、「近代」小説ではない。映画は、それを一気に現代の映像表現形式に翻案するため、話を忠実に再現する方法はとっていない。原話に忠実な映画であれば、映画の中心は岡崎氏が指摘していた通り、「格闘の特撮」になるはずである。元々の唐代伝奇「聶隱娘」は、彼女の修行の段階を語らせ、さらに彼女と刺客たちの超自然的戦闘を描くことで読者の興味を引く。その一方、唐代伝奇では聶隱娘の場面ごとの思いはよくわからない。彼女は感情をあらわにしない仙人のよ

うな存在で、術を用い、優れた武術の使い手で、人々に災いを予言することもあるが、結局は何処とも知れず去っていく。

この映画から読み取れるのは「人の思い(情)への着目」であろう。武侠映画と銘打っておきながら、戦闘場面の割合は多くなく、美しい景色が音楽と共に描写される時間の方が長い。聶隱娘が家族と離れ、暗殺者として育てられる理由は当時の政治状況によるものであったとされ、彼女自身の意志はともかく周囲は良かれと思って女道士に預けたことになっている。彼女にとっては、思い描いた未来を奪われ、突然暗殺修行に出されるのであるから、理不尽極まりない体験である。映画内に流れる悲哀に満ちた描写には互いにすれ違う周囲の人との思いが投影されているといえないだろうか。

映画では、最後に彼女は旅先で父親と心を通じさせることで、自らの理不尽な境遇におりあいをつけ、全く異なる異国からの旅人と行動を共にすることで、人生をリスタートする。映画には唐代伝奇では描きようもなかった聶隱娘の人間としての成長が描かれている。原話では暗殺者としてどのように成長したかが技の習得と共に回想として語られるが、それとは全く異質のものだ。原話は人々の神妙なものへの興味を満足させるように書かれており、聶隱娘自身が場面ごとに抱いた感情や彼女の行く末には関心がない。しかし、そのままでは現代人が鑑賞するには不十分なのである。

ではなぜこの物語が現代において映像として翻案される必要があるのかといえば、それは、聶隱娘が女性であること、当時の価値観に縛られない存在である点にあるだろう。その数奇な運命故に、顔色一つ変えず人を殺す術を身につけたが、父親からも畏れられる存在となってしまった女性が、自ら選んだ男性と人生を共にし、自分が仕えたい人に仕えたということが、現代人に強い印象をあたえるのである。その異能さや超人的な戦いの場面は、それを忠実に映像化してもどこかで見たようなものにしかならず、原話の特異性を発揮できない。それよりも、彼女を

中心にその情緒をじっくりと描く方が、現代人に訴えるところがあるのだろう。物語の中に彼女の果てしない孤独を見てとれば、そこに読み手が心を動かす強い動機を感じ取ることができるだろう。

唐代伝奇については、史実であるのか虚構であるのかが古来議論されてきたが、この映画では、出来事そのものよりも、登場人物が抱くであろう感情のリアリティが重視されている。描かれているのは虚構の世界ではあるが、真実性がなければ人の心に訴えかけることは出来ないものであり、これは原話には求めようもない要素だといえる。

5. おわりに

ここまで文言によって書かれた唐代伝奇小説「聶隱娘」と映画『黒衣の刺客』の内容を比較し、両者が何を描いているのかを詳しく検討した。原話の中心人物は聶隱娘であり、彼女の意志とは関わりは無く家族と引き離されたが、尼によって家に帰されて以降、彼女は結婚や仕える相手の選択については自分の意志を貫き自由に行動しているように見える。彼女は封建社会での典型的な女性の生き方はできず（あるいは自らそれを選ばず）、その上常人には操れない術を身につけた暗殺者であり、社会から逸脱した存在である。その特異性を描くことが、唐代伝奇小説「聶隱娘」の主題ともいえよう。一方『黒衣の刺客』では、原話が字数を割いて描いていた不思議な術を使った戦闘を取り上げず、さらには武侠映画といいながら人間同士の戦闘場面もそれほど長い時間を割かず、ヒロインである聶隱娘は感情を抑制し、物語はゆっくり動く。聶隱娘は自らの思いを言葉で語ることはなく、その表情と行動から、孤独と疎外感をにじませる。結末で彼女が両親の元を離れ遠方に旅立つことを選択する姿に、現代に生きる我々も彼女を理解し寄り添うことができるようになる。それは、唐代の社会を背景に描かれた文言小説と現代の我々をつなぐ、一人の女性のままならない人生への悲しみ、孤独、そうでありながらも自ら進む道を

選択する力強さという要素が存在しているからだといえないだろうか。映画が必要としていたのは、原話の枠組みだけであったが、映画はそれを観る現代人たちと原話をつなぐ感情の動きを巧みに織り込み、それを風景や音楽を使って包括的に表現している。翻って言えば、聶隱娘が内面に抱く人生への理不尽な思いや深い孤独が唐代伝奇小説にある現代的要素であったということになる。

なお、今回本稿が使用していた娯楽という言葉の定義があいまいであること、また、分析において映画製作の当事者の創作意図を全く考慮に入れていないことは問題であり、今後さらに資料にあたり、より詳細な分析と検討を行う必要があるだろう。

最後に、今回取り上げた映画とは異なる最近の翻案作品として、中国系アメリカ人であるケン・リュウによる「The hidden girl（邦題は「隠娘¹⁷⁾」）」に触れておきたい。こちらも『黒衣の刺客』と同じ「聶隱娘」に基づいた作品であるが、『黒衣の刺客』では重視されなかった聶隱娘の修行時代に重きを置き、聶隱娘が誘拐され家に帰る前までを描き、彼女が師匠の元を離れてどう生きるのかを自己決定していく点に焦点を当てる。これは本稿の指摘と方向性を同じくしており、筆者はこの短編SF小説の存在自体が唐代伝奇「聶隱娘」が形を変えて何度も翻案される要素を持っている証左といえると考えている¹⁸⁾。

以上課題が残る形であるが、ここでは「聶隱娘」について、女性主人公の孤独と疎外感、さらに唐代の価値観に縛られず人生を自己決定していく姿が現代の私たちに通じる要素であることを指摘できたことを強調して、本稿を終えたい。

注

- 1) 詳細は百度百科「聶隱娘之絶命刺杀」の項による。<https://baike.baidu.com/item/%E8%81%82%E9%9A%90%E5%A8%98%E4%B9%8B%E7%BB%9D%E5%91%BD%E5%88%BA%E6%9D%80/54016263>（2022年10月16日閲覧）映画は未見。
- 2) <https://baike.baidu.com/item/%E8%81%82%E>

- 9%9A%90%E5%A8%98%E4%BC%A0%E5%A5%87/19247363?fr=aladdin (2022年10月16日閲覧)
- 3) https://baike.baidu.com/item/%E5%A4%A7%E5%88%BA%E5%AE%A2%E4%B9%8B%E5%A4%A7%E5%94%90%E8%81%82%E9%9A%90%E5%A8%98?fromtitle=%E5%A4%A7%E5%94%90%E8%81%82%E9%9A%90%E5%A8%98&fromid=17880149&fromModule=lemma_search-box (2022年10月16日閲覧) このテレビドラマは1996年から香港 TBV で放送されていた『大刺客』という全35話のシリーズの一部である。いずれのドラマも未見である。
- 4) この映画に関する監督・脚本家の創作については、稿を改めて述べる。
- 5) 中島長文訳『中国小説史略 1』東洋文庫, 183頁, 1997年
- 6) 上原徳子「『杜十娘怒沈百宝箱』の翻案について—「杜十娘」から Miss Tu へ—」『中国古典小説研究』(20), 25-38頁, 2017年
上原徳子「林語堂による英訳「鴛鴦傳」について」『アジア遊学』(218), 181-190頁, 2018年
上原徳子「林語堂による英訳「鴛鴦傳」前書きの検討」『宮崎大学教育学部紀要』92,121-129頁, 2019年
- 7) 石昌渝主編『中国古代小説总目』文言卷 山西教育出版社, 315頁, 2004年
- 8) 竹田晃・黒田真美子編『中国古典小説選5 枕中記・李娃伝・鴛鴦伝他』明治書院, 518頁, 2006年
- 9) 李昉等編『太平廣記』巻194 (1456-1459頁) 中華書局, 1961年 (なお使用している一部の漢字の字体と句読点は変更しているところがある。)
- 10) 前掲書『中国古典小説選5 枕中記・李娃伝・鴛鴦伝他』, 453頁
- 11) 前掲書『中国古典小説選5 枕中記・李娃伝・鴛鴦伝他』, 507頁
- 12) 2015年台湾・中国・香港・フランス合作映画。原題は「刺客聶隱娘」英文題名「THE ASSASIN」。なお、映画にはいくつかのバージョンが存在しているが、本稿は日本公開版 (公開日2015年9月12日) を収録したDVD (2016年3月2日発売, 販売元は松竹) による。
- 13) 岡崎由美『漂白のヒーロー—中国武俠小説への道』大修館書店, 2002年
- 14) 『黒衣の刺客』パンフレット (編集・発行 松竹株式会社事業部 2015年9月12日発行) 掲載, 浦川留氏「ホウ・シャオシェンが撮りたかった, 誰も撮らなかつた武俠世界」による。
- 15) 注14に同じ。
- 16) 『黒衣の刺客』パンフレット (編集・発行 松竹株式会社事業部 2015年9月12日発行) 掲載, 岡崎由美氏「原作「聶隱娘」とその幻想的世界を育んだ唐の社会」による。
- 17) ケン・リュウ (古川嘉通・他訳)『生まれ変わり』, 新☆ハヤカワ・SF・シリーズ5043, 早川書房, 2019年所収
- 18) ケン・リュウの翻案については別稿で検討する。
- 本研究は JSPS 科研費19K00373の助成を受けたものです。

Research Note

A Study of the Legendary Novel of the T'ang Dynasty *Nie Yinniang* — A Comparison with the Film —

UEHARA Norikoⁱ

Abstract : Through a comparison between *Nie Yinniang*, a novel from the T'ang dynasty, and the film adaptation of *The Assassin*, this article examines whether T'ang dynasty literature may have elements in common with modern entertainment works, and considers the universality of classical Chinese novels. Nie Yinniang married a man of her own choosing and served whom she wanted to serve. The reason this story continues to be adapted today is that the main character is a woman who is not bound by the values of her time. If you see her constant loneliness in the story, you can sense the elements that move the reader.

Keywords : The Legendary Novels of the T'ang Dynasty, swordsman image, martial arts film, adaptation

i Professor, College of Social Sciences, Ritsumeikan University

